

# 中世紀に於ける

## ロンドン旧市の庶民生活

塚 本 貞 二

### 一、旧市の形成とその概念

テムズ河北岸の Blackfriars Bridge と約一哩下流のロンドン塔を結んで、北岸に二哩強の弧を画いた地域が、ローマ植民時代のロンドンに該当し、厚さ九呎乃至十二呎、高さ二十呎の城壁を有していた。軍略的には郊外二十哩北方の Verulamium (St. Albans) や中部地方の Eboracum (York) の方が重要だったけれど、水陸の要衝にあつたためロンドンの方が遙に大きな発展を遂げた。先住民 Celts はこの都を Lyndin と名づけたが、Llyn (発音 lun) は marsh, lake 他方 din (又は dun) は hill, fort のことであるから、この名は lake fort (湖沼の要塞) を意味する。しかしローマ人は Lyndin をラテン語的に Londinium と改称した。

城壁の外部、殊に東部には沼沢地が散在しておりローマ人はこれを墓地として利用したが、旧市の東方が (the) East End として貧民街となる運命は当時既に決定していたのである。これに反し、Scotland へ通つて Waling St. (註) が旧市を貫通して西へ延びて

いたことは、これまた今日の繁華街 (the) West End を形成する裏づけとなつたのである。

(註) Waling St. はローマ人の作つた軍用道路の一つで、Dover 附近の Richborough から出発してロンドン經由遠く Scotland の Ardoch 辺まで達してゐた。他の一つは Roseway へ Devonshire の Tolness へ Exeter, Bath, Lincoln を經つ Barton-Humber に通じていた。

中世紀の城壁には右から左へ数へつ Posterngate, Aldgate, Bishopsgate, Moorgate, Cripplegate, Aldersgate, Newgate, Ludgate の八門とテムズ河岸沿ひに Dowgate, Billingsgate の二門があつた。当初城壁は将来の発展に備へ広い土地を画していたが、ローマ人植民時代の旧市は現在の Mansion House 近辺の Walbrook 河 (現在 Walbrook St.) 以西へは中々延びなかつた。城門の開閉は Bow Church; St. Martin's-le-Grand; St. Giles, Cripplegate; All Hallows, Barking; St. Bride, Fleet St. 等の鐘によってな

された。しかし河岸の二門は十二世紀に、また残余の八門も Shakespeare 時代には既に消滅してしまつていた。今日でも城門の所在地は町名に残つており、かつその断片は微かながら St. Alphage, London Wall, St. Martin's Court, Ludgate Hill, St. Giles, Cripplegate など (George St. ; Trinity Sq. ; Tower Hill; the Minorities 等に於て見られる)。

Hardy はその作品にロンドン風の物をほとんど取入れなかつた作家であるが、一八七五年 *The Cornhill Magazine* のため書つた小説 *The Hand of Ethelberta* の中で、珍しく St. Giles, Cripplegate 境内にある旧城壁の一角を背景として静かな寺院の春を描つてゐる。

Ladywell says : "I had no idea there was such a lovely green spot in the City."

The place was truly charming. The untainted leaves of the lime and plane trees and the newly sprung grass laid in the sun a brilliancy of beauty that was brought into extraordinary prominence by the sable soil showing here and there, and the charcoaled stumps and trunks out of which the leaves budded.

——Hardy, *The Hand of Ethelberta*.

レディウェルは「市内にこんな美しい芝地があるとは思ひまんでした」と言うた。

そこは本當に綺麗だつた。シナヤスズカケの木の汚れのない葉や、新しく芽生えた芝が日光にきらきらして、その美しいことと言つたら、こゝかしこに肌を露はしている土地が黒

ずみ、また芽を出した木の莖や幹の地色が炭を塗つたようであつただけ、余計その美しさが際立つて見えた。

次でアメリカ蔓に覆はれた鉄灰色の bastion (稜堡) が出て来るが、これが城壁の名残りである。

"What is this round tower?" Ladywell said, walking towards it. "Oh, didn't you know that was here? That's a piece of the old City wall," said Neigh, looking furtively around at the same time. Behind the bastion the churchyard ran into a long narrow strip, grassed like the other part, but completely hidden from it by the cylinder of ragged masonry.

「この円塔は何でしょうか」とレディウェルはその方へ歩み寄りながら言うた。「おや、こゝにあるのを御存じなかつたのですか。あれは旧市の城壁ですよ」とネーはそつと辺りを見廻はしながら言うた。境内は稜堡のうしろで細長く狭ばまり、こゝにも芝が生えていたけれど、デコボコの石造りの円柱にすつかり隠されて見えなかつた。

この St. Giles は一九四〇年八月二十四日ドイツ最初のロンドン空爆によつて相當の被害をうけた。

城壁内を区域とした旧市は人口の膨脹と共に東部では Aldgate、北部では Bishopgate 及び Cripplegate が夫々境界を延長し、西部では Smithfield が旧市に編入された。特に西方への発展が著しく、一三六六年旧市の西方に散在する Inns of Court (四つの法学院) を合併して、Holborn と Fleet St. 以東を市域とした結果、これまで城壁内の地域のみを指称したロンドン旧市の概念は城壁外

の編入区域をも含めたものとなり、更にこのロンドンが四方へ發展するに及び、こゝに新しい旧市と大ロンドンとの概念的対立が明確となつた。

(註) 旧市は the City または the City of London と言ひ、大ロンドンは the city of London, (greater London または the metropolis of London, the Metropolis と言ひ)。面積は前者が一〇三平方哩、後者が一一六・九五平方哩である。

語学的に見ると、旧市の場合の of は genitive であり、大ロンドンの場合の of は appositive と解される。(研究社文法シリーズ) 神戸外大小西助教教授執筆 No. 19, p. 31; *Kruisinga, English Grammar*。

the City of ~ を称するのは人口の多寡、政治的、経済的重要性がこれを決するのでなく、宗教的、歴史的重要性によるもので、大伽藍の所在地はこのタイトルを取る。例へば大ロンドン内でも、旧市のほか the City of Westminster (一五四〇年 Henry VIII の charter により成立)、地方では the City of Canterbury, the City of York がある。全体として the City of ~ を取る都市は非常に少数である。

## 二、庶民生活の方向と

### アムニューズメント・センター

中世紀の庶民生活は寺院、商店街、盛り場、酒場等を中心として見られるが、寺院の本堂が遊歩地や市場と化し、繁華街の広場が刑場であつて、死刑、曝し首、絞首台 (gibbet) に吊されたり、曝し

台 (pillory) にはめられている罪人は勿論、莫連女の水責めや牛いじめ (bull-baiting)、熊いじめ等の見物が庶民最大の娯楽だつたことはこの時代の大きな特色である。London Bridge (Elizabeth I 時代のこの橋は両端に門があり、橋の両側には四階建の商店、また中央には St. Thomas a Becket を祭つた礼拝堂がある等類例のない様式だつたので一名 Nonsuch House とも言つた)。関門屋上の曝し首は多い時は一時に三十を数へた。要するに、繁華街や国道筋など人目につく箇所で衆人環視の裡に処刑したり、或は衆隊附で囃したてながら犯人を大通りから監獄へ送りこんだのは(例へば *Canterbury Tales* の *Cooks Tale* に出る年期小僧 Perkyng の場合の如き)人間本来の sadism (加虐愛)を満足せしめると同時に極端な因果応報主義の中世紀刑法がこれによつて罪人に最大の屈辱と苦痛を与へようとしたものである。この傾向は十九世紀になつても衰へず、一八六四年に執行された列車内殺人犯の死刑には五万人の出入があつた。また死刑の公開は一八六八年五月二十七日の処刑を最後に禁止されたが、この日物見高い市民は大挙 knifeboard-bus (屋上の坐席が縦に背中合せとなつてゐる乗合バス)に乗つて出かけ、変態意欲を最大限に満喫した。更に屍盜販売(十九世紀初め全英を戦慄させた Burke and Hare 事件では一体の売値七ポンド十シリング)が貧民の隠密の生業であつたことも庶民生活の一面と言へよう。かゝる生活俗域が旧市内外に多数あつたことは同時に寺院の数が異常に多かつたことの説明に通ずる訳である。Bower の研究によると、一六六五年の大火前、旧市には百九の寺院が存在していた。一六六六年の Vischer の地図を見て、St. Paul's を中心として寺院

の尖塔が林立するさまは実に壯観である。

筆者は今主として中世紀に於ける庶民生活の実態に触れて見たい。問題は勢ひ彼らの生活の暗黒面にまで及ばざるを得ないであろう。

旧城門 Newgate 破壊後、その跡に Newgate Prison が出来たが、施設待遇の不備は国内第一であつた。この監獄と向ひ側の St. Sepulchre's Church とは地下道（一八七九年埋立）を以て通じていたが、一六〇五年富商 Robert Dove の希望により、同氏寄進の五十ポンドを基礎として、永代この教会で死刑囚に最後の聖餐を供し、かつ死刑の前夜、寺男が振鈴 (bellman) を振つて、次の一節を誦しながら、彼らに死期の切迫を予告すると共に悔悛の情を促すこととなつた。一夜が明けて三々五々屠所に引かれゆく彼らは——一七八五年のある日はひと朝には二十人処刑——中庭 (courtyard) で相抱擁して Welcome! Welcome! を唱へ、心安らかに絞首台上の露と消えた者もあつたと伝へられる。この慣習は一七八四年まで続いたが、その振鈴は今もなおこの寺院に保管されている。

"All you that in the condemned hold do lie,  
Prepare you, for tomorrow you shall die;  
Watch all, and pray, the hour is drawing near  
That you before the Almighty must appear;  
Examine well yourselves, in time repent,  
That you may not to eternal flames be sent.  
And when St. Sepulchre's bell tomorrow tolls,  
The Lord above have mercy on your souls."

Past twelve o'clock."

死刑囚房に寝ている者共よ、

覚悟をしたがよい、あしたは死ぬ日だ。

皆寝ないで祈つたがよい、

神の前に出る時は近づいている。

よく省みて早く悔ひ改めるがよい、

永遠の劫火へ送られぬよう。

あした聖セパルカーの鐘が鳴るとき、

神が御前達の霊の上に慈悲を垂れ給へ。

時刻は十二時すぎ。

Shakespeare の *Macbeth* に出る bellman は、恐らく振鈴を鳴らして囚人に死期を予告するこの寺院の夜廻りにヒントを得て、同じく死を暗示する不吉な鳥の梟にかけたものであらう。

Lady Macbeth. It was the owl that shrieked, the fatal bellman, which gives the sternest good-night. — Shakespeare, *Macbeth*, II. 2. 4.

マクベス夫人 今叫んだのは梟の声です。不気味な声で「御休みなさい」と呼びたてるあの不吉な夜廻りの。

Webster の *Duchess of Malfi* にも同様のアリアーシヤンがある。  
I am the common bellman  
That usually is sent to condemned prisoners,  
The night before they die.

旧市の東北門 Bishopsgate と東門 Aldgate を結ぶ城壁沿ひの溝は犬猫その他のいふ捨場同然だつたので、十六世紀には埋立て

Houndsitch 街となつたが、後方も湿地や墓地で好ましくぬ地域だつたことは上述した。Houndsitch 及びその東方の Petticoat Lane (現在 Midlessex St.) 更に the Minorities, Commercial Road, Whitechapel は貧民就中ユダヤ人の多い所謂 East End であり、中世紀に於ては拘捕、前科者、娼婦等の巢窟であつた。ユダヤ人はもと旧市内に散在していたのを William I がこれを旧市中央の Old Jewry (= Judea ; the land of the Jews ; Palestine.) に集中せしめたのであるが、一二九〇年英国から追放され、一六五七年 Cromwell が復帰を許した際、下層のユダヤ人が前記の所に定着して、古物、新古衣類の売買、仕立職等に従事し、こゝが ghetto (ユダヤ人町) となつたのである。日曜日の朝立つ彼らの古着、雑品の市は肩摩殺撃の巷であり、今なお全く異つた世界の感じが深い。一八三一年以降は旧市にも開店を許されたが、實際問題としては洋服屋が多かつた。West End の Wardour St. 近辺にユダヤ人の婦人服屋が多いのと比較して妙な対照である。

中世紀に於ては宗教関係者はクリスチャンの金貨業に好意を示さなかつたので、勢ひユダヤ人がこの方面へ進出し、当局はむしろこれを保護奨励さえした。従て Old Jewry のユダヤ人には金貨兼業の者があつた。しかしこの時代に於ては、クリスチャンとの識別を容易にするため、ユダヤ人は黄色の尖帽に黄色の gabardine (ギヤバジン) の上衣を着けていた。他方自己以外の異教徒を、クリスチャンは heretic (heathen 又は pagan) と呼び、回教徒はこれを Giasour と夫々呼んでいたように、ユダヤ人もクリスチャンを Gentile と呼んでその宗教的対立観念は強烈であつた。今日ユダヤ人は

イギリスに於て、同国人と全く平等の市民権を与へられているが、言語、宗教、暦、度量衡制、食物等を異にするだけ今なお多少の問題を残している。(註)

(註) 言語はヘブライ語、宗教は唯一の神 Jehovah を信仰し、別途の教会 (synagogue) 牧師 (Gabb) 安息日 (ユダヤ人の sabbath は土曜日) を有している。暦は一種の太陰暦で、新年は太陽暦の秋分の頃 (實際には九月又は十月) に始まり一月を Tishri と呼び、その元旦、二日の新年祭を Rosh Hashana と称する。安息日及び祭日はすべて前日の日没時に始まる。度量衡の詳細は省略するが、食物は例へば豚肉は彼らの絶対に忌み嫌うところである。

Dickens の *A Tale of Two Cities* に出る銀行の門番 Cruncher は、夜陰ひそかに死体を発掘して解剖医に売りつける屍盜常習者 (body-snatcher, resurrectionist) であり、Houndsitch の住人であつた。しかし彼はユダヤ人でもなく、親子代々門番たることに大きな誇りをもつ典型的な John Bull であつて、その一家は常にこの悪習から足を洗はうとするが、赤貧のためこれを果し得なかつた善意の細民だつたことは次の一節を見ても分かる。

His name was Cruncher, and on the youthful occasion of his renouncing by proxy the works of darkness, in the easterly parish church of Houndsitch, he had received the added appellation of Jerry. — Dickens, *A Tale of Two Cities*.

彼の姓は克蘭チャーで、洗礼の際、教父母が幼児に代つて、

成長したら後暗い商売はさせないとハウンズディッチ東部の教会で誓つた時に、シェリーと言う附屬の洗礼名を貰つた。

East End に人間のドン底生活があつたのは当然として West End その他旧市内外の繁華街即ち光の都 (La Ville Lumière) が同時に人生の暗黒面だつたことは当時の社会に共通の現象であつた。旧市の四分の一を占めた修道院 (monastery) が一五三七年から三九一年にかけて解体され、その敷地が市民に分譲された結果人口は急激に増加した。宗教著述家 Heylyn が推定した一六二一年の旧市の人口四十万人は過大に失するとしても、旧市に一大ブームが出現したのは事実であつた。Elizabeth I は一五八一年城壁外三哩以内の地点に家屋の新築を禁じ、その後一六〇二年及び Charles I の一六〇三年にも同様の布告が出たけれど効果なく、旧市は四方へ発展した。殊に西方への発展に就ては、前述した Watling St. が旧市を西方へ貫通していたこと、四つの法学院が西方にあつたこと、St. Paul's の西方一哩乃至一哩半の近距離に Whitehall その他の宮殿及び Westminster Abbey が存在し、その附近に貴紳の邸宅があつたこと、ロンドンでは英国の南岸を洗うメキシコ湾暖流の影響で一年中温暖な西風や西南風が優勢であり、常に北風や霧及び煤煙を東方へ駆逐していること等が主な理由として挙げられる。しかし旧市の西方は Holborn では今日の Staple Inn の前にある Obelisk (方尖碑)、また Fleet St. 及び Temple Bar Memorial (聖堂関門記念碑) が嘗ての旧市の境界であり、それから西は the City of Westminster に属し、今日の所謂 West End が始まるのである。道路中央の聖堂関門記念碑は半鷲半獅子の怪獣 (the griffin) の

像であるが、Fleet St. はここから the Strand (註) となる。交通の妨害となるため一八七八年に除去されたこの関門の上屋は他の城門、例へば Newgate 及び Aldgate 同様牢屋であつて、屋上のスパイクに刺された曝し首は一大見物として人気を集めた。Shirley の *Pleasure* に於て Calceina は高級住宅地 the Strand に家を構え、流行を追う貴婦人になるのを唯一の念願として次の如く述べている。話中の pagantry とは曝し首の催しを意味するのである。

"My balcony shall be the courtiers' idol, and more gaz'd at than all the pagantry at Temple Bar."——Shirley, *Pleasure*, 1. 2.

私のバルコニーを廷臣の憧憬の的とし、どんな野外劇よりも見物にしてやりましよう。

(註) the Strand は St. Paul's と Westminster Abbey 間約一哩四分の三の略、中央に位し「河岸の意味で、テムズ河に平行している。Tudor 朝時代まで、南側には貴族、僧正の邸宅が密集し、北側には普通の人家や商店が散在していた。河岸と言つても、今日では the Strand とテムズ河との中間にある the (Thames) Embankment が河沿ひになつていて。

the Strand は普通名詞より転化した固有名詞で the を附ける。この中がロンドンの町名で the を取るもの、the Mall (樹蔭路)、the Haymarket (おべり市場)、the Poultry (家畜)、the High St., (the Great North Road, the Finchley Road, the Minorities (sorores minores, minoras, 修道尼), the (Thames) Embankment, the Bank (side) 等がある。

Bankside は中世紀に於ては the を附けたが、今日は区々としてゐる。

Elizabeth I 時代は庶民生活が極めて活潑で、安息日 (Sabbath) は必ずしも嚴重に守られず、女王の即位第七年の布告は日曜日でも礼拝式終了後に定期市及びマーケットの開店を許したし、牛いじめや熊いじめも James I が流血の惨を戒めるため日曜日の興行を禁止するまですべて日曜日に行はれた。また Elizabeth 朝の旧市は清教徒の精神が非常に強く、俳優も Shakespeare が Lord Chamberlain (内大臣) 一座に所屬していたように貴紳の御抱へになつていないといふ一五七二年の法律によつて浮浪人扱ひをうけたし、劇場も市内での建設が許されず、十六世紀後半から十七世紀前半にかけて築出した八つの劇場は何れも市外に建てられた位であつた。しかし市外北部の Finsbury Field とテムズ河南岸の Southwark が二大劇場地帯として急速に勃興した。特に後者には the Globe 等四つの劇場と牛、熊、馬、猿 (Jackanapes) いじめ、闘鶏等の Paris (Garden) や Bear Garden が密集してゐたので、Southwark は旧市内外随一の歓楽センターとなつた。他方旧市内に於ては王室礼拝堂所屬の少年聖歌隊の劇場としてのみ開場を許された Blackfriars や Whitefriars の聖堂跡の建物が、約十年続いた少年劇の廃止と同時に一般劇場となつたのも時代の趨勢であつた。

なお Southwark が盛り場として栄えた一因は (the) Bankside (河岸通り) の水上で時々馬上の槍試合 (joust, tilt) や槍射 (quintain) の競技が行はれたことにある。この辺は河口から約五十里の上流にあるけれど、今日でも二千屯の汽船が週航出来る位であり

、當時に於ても Westward ho! Eastward ho! の声が絶えることなく、テムズ河は庶民生活の動脈であつた。テムズ河が愛称的に Old Father Thames と呼ばれたのはこの所以である。Water-poet と呼ばれた大衆詩人 J. Taylor はテムズ河を次の如く謳歌してゐる。

But noble Thames, whilst I can hold a pen,

I will divulge thy glory unto men ;

Thou in the morning, when my coin is scant,

Before the evening doth supply my want.

尊いテムズよ、俺はペンがもてる限り、

御前の栄光を人に明かそう。

御前は俺の懷中が淋しい朝、

日の暮れないうちに望みを充たしてくれる。

Southwark が繁昌したもう一つの原因は、港町の常として Bankside の裏通りには約二十軒の娼家 (the Bordello, the Brothels, the Stews) が軒を列ねてゐたことにある。一五四五年嚴重な抑圧手段が取られたけれど効果がなかつた。女は主としてオランダまたは Flanders 出身の者で、Shakespeare はこの魔窟が Winchester Bishop の管轄下にあつたことから Gloucester 公をして喧嘩の相手とせよ Winchester 僧正を Winchester goose と呼びしめ、不潔病に罹つてゐる者との輕蔑の意味に使つてゐる (Shakespeare, Henry VI B, 1. 5.)。要するに the Bankside と言ふは rowdyism (低俗) を profanity (神聖冒瀆) と同意語だつたことは當時 Bow Church が cockney (低級な下町人間) と同意語だつたり、今日言

葉の荒い魚市場の Billingsgate が ribaldry (下種口) と同意語であるのと同じであつて、庶民の人生縮図は Bankside に於て最も生々と描き出されてゐた。次に掲げる Shakespeare の一節は當時の庶民氣質が赤線地区や俗化した聖域を通じて巧みに描写されてゐる。

Falstaff. I bought him in Paul's, and he'll buy me a horse in Smithfield : an I could get me but a wife in the stews, I were manned, horsed, and wived. — Shakespeare, *Henry IV B, I. 2. 58.*

フォールスタフ あいつは聖ポール寺院で買つて来た下郎だが、スミスフィールドへ馬の買出しに行くつてか。これぞ若し俺が女房を例の女郎屋で手に入れることが出来りや、下男も馬も女房もすつかり揃うんだ。

女郎が欲しけりや Westminster、下郎が欲しけりや St. Paul's、馬が欲しけりや Smithfield と言ふのは當時の諺であつたが、Westminster 街頭で客引をした女は Bankside から遠出した遊女と寺域自体に巢喰う町の女であつた。聖域の特権に便乗して無法者がこれを根城としたことは当時どの寺院にも共通の現象であつた。Watling St. の発着路である the Dover Road が Southwark に入り、London Bridge を渡らなうでナムズ河南岸を河沿ひに廻り、Westminster 対岸で渡河し、この村を経由今日の Marble Arch の所で Edgware Road に合する道の方が Watling St. の本道で、旧市經由の方が枝道だつたと言はれる位だから、當時の Westminster は中々賑かな宿馬だつたのである。

St. Paul's も非常に俗化してゐた。寺院の aisle (側廊) や nave (本堂) を Paul's Walk (聖ポール寺院散歩道) または Duke Humphrey's Walk (註一) と称し、一五五〇年から一六五〇年 (註二) まで訴訟を待つ弁護士、流行の尖端を行く派手者、ニエースも寄り人、求人求職者、家出娘、女衛、行商人、掏摸等で雑踏し街頭同然だつた。本堂の扉は広告板同様で、Si Qui door (If any one door: — If any one 'wants a servant, etc.) と言ふたが、主として口を求める召使に利用された。

(註一) 遊歩道の如くになつてゐた側廊に Dover の Constable, Sir John Beauchamp の墓があつたが、これを (Honor-stone) の Duke Humphrey の墓と間違へたことからこの名が出た。  
(註二) 市長は既に一五五四年本堂内に於て營利的行為を目的とした市民の集合を禁止したとも伝へられる。

旧市内西南方河岸近くの Blackfriars は一五三八年修道院解体後一部の敷地は上流の住宅地となり、流行の発祥地となつたが、隣り合せの敷地には依然として貧しい清教徒が飾り羽根の製造で糊口を凌いでいた。他方周辺には修道院時代の特権を悪用して多数の御法度者が潜伏してゐた。また俳優 J. Burdage は建物の一部を劇場に利用しようとしたが、同所に住む上層連の反対で果せず、Windsor の王室礼拝堂長 R. Farrant が Windsor や Westminster Abbey 及び St. Paul's 所屬の少年聖歌隊の劇場に使用したが、一五九六年には遂に普通の劇場となつてしまつた。當ての修養道場も騒音の巷と化し、劇場隣りの St. Anne は礼拝式も執行出来ない位であつた。



Blackfriars の少年劇は色々の物議を醸して一六〇八年中止となり、Shakespeare の所謂 young eyases (鷹の雛) はこゝから西北方の市域にあつた Whitefriars (移り、the Master of the Revels (宮廷饗宴長) 直属の子供役者を中心として活動したが、少年劇の生命も十年で終はり、こゝも一般劇場となつてしまつた。しかしこの少年劇が当時如何に人気を集め、周辺を盛り場化するに与つて力あつたかは *Hamlet* の一節から察知出来る。しかして最も有名な外題は Barry の *Ram Alley* (註) とか、Mason の *The Tragedy of the Turk* であるが、Beaumont や Fletcher の書いた名作中、これら少年役者のために書下ろしたものが少なくなない。

Rosencrantz. There is, sir, an airy of children, little eyases, that cry on the top of question, and are most tyrannically clapped for't: these are now the fashion. — Shakespeare,

*Hamlet*, II, 2. 354.

実は殿下、鷹の雛のような一群の子供役者がいまして、恐ろしく甲高い声で台詞を喚ぎ、途方もなく喝采されています。今はそれが大流行です。

(註) Ram Alley は Fleet St. の近くにあつた往時の町名で、無法者の巢窟であつた。

Whitefriars も修道院解体後一部の敷地は上流の住宅地となつたが、聖域の特権が一六九七年まで黙認されたため、こゝも悪党の根城となり、世人はこゝを Alsatia (註)、またこの不逞の徒を Alsatian (註) と呼んだ。

(註) Alsatia は独仏間の Alsace の如く、所屬不明の土地の

意味から犯罪者の潜伏地を言う。イギリス人はシェパード犬のことを Alsatian と言うが故に、本文の意味と混同しないよう注意を要する。

旧市の東北隅 Bishopsgate とその西方の北門 Moorgate をつなぐ城壁の外側にあつた溝 Moor ditch はうみ捨場であると同時に、がみがみ女を懲罰椅子 (cucking stool, ducking stool) で水責めにしたり、Bedlam Hospital (精神病院) から迷ひ出た狂人を縛つて見世物にしたりするので有名だつた。更に Norden の一五九三年の地図を見ると、Moorgate の東北方に東西約三百二十ヤード、南北約二百ヤードの湿地があつた。今の Finsbury Circus がその一部だつたのである。

こゝもうみ捨場だつたが、一六〇六年埋立て Moorfield と称し、民兵 (citizen forces) の訓練場、市民の運動場、リンネルの晒し場としたが、絶えず決闘や喧嘩が行はれ、物日には易者、演歌師、興行物、掏摸、迷ひ子となつた Bedlam の狂人で賑はつた。Shakespeare の *Henry VIII*. V. 4. に於て王女 Elizabeth の洗礼還啓式を見ようと、宮廷の門前にこつた返へす市民を、門番が Moorfield や Paris Garden の与太物扱ひにするのを見て、この地域が低級な歓楽地だつたことが分かる。

今は肉屋町であるが、一八五五年まで毎金曜日に牛馬、豚羊や農具の市が立つた城外の北方 Smithfield の広場では、有名な St. Bartholomew の市が八月二十四日を挟んで三日間行はれ、あらゆる興行物や名代の焼豚売りで賑ひ、一二三年から一八五五年まで約七百三十年の間続いた。それだけ犯罪の源泉地であつた。また広場

の東隅は Queen Mary が多数の新教徒を、また Elizabeth I が非国教徒 (nonconformists, dissenters) を火焙りの刑に処した刑場であり、仕置日には物好きな見物人が St. Bartholomew Church や St. Bartholomew Hospital の門前に市をなしたと言へる。

健全な意味で庶民生活を賑はしたものに一二三五年から十八世紀まで存続したロンドン塔の動物園 (the Menagerie) がある。特にライオンはロンドン七名所の一つに数へられ、ライオン見物 (seeing the lions) が名所見物 (seeing the sights) と同意義なものから出たのである。Shakespeare の次の一節はこのライオンから暗示を得たものである。

Speed. You were wont, when you walked, to walk like one of the lions. — *Shakespeare, Two Gentlemen of Verona, II. 1. 28.*

スピード 貴方は御歩きになると、いつもあのライオンが歩くようです。

寺院が俗化した位だから、取引所の屋内が街頭同様だったことに何の不思議もない。中世紀旧市には三つの取引所があつた。設立が一番古い St. Paul's 横の Old Change は造幣、両替所として事もなかつたが、そこから Cheapside 及び the Poultry 経由真東約五町の所に一五六六年 Sir T. Cresham が建てた the Exchange (一五七〇年 Elizabeth I の行幸以来 the Royal Exchange と改称) 及び一六〇九年 the Strand に開設された Britain's Bourse (通称 the New Exchange) (註) は高級装身具商が店舗を列ね、庶民の散策地ともなり、悪人の稼ぎ場であつた。就中 the Royal Exchange は四階建て百余の商店を擁し名所化してゐた。

(註) bourse = bourse = purse, exchange.

St. Paul's, the Royal Exchange をつなぐ Cheapside (長約四町) は旧市第一の商店繁華街として、各層就中庶民の生活が最も活潑に営まれた。先づ Cheapside が富力のシンボルであつたことは Shakespeare の引用によつて明かである。

Cade. All the realm shall be in common ; and in Cheapside shall my palfry go to grass. — *Shakespeare, Henry VI B, IV. 2. 75.*

ケード 国を共有地にして、チープサイドで以て俺の馬に草を喰らはしてやろう。

Cheapside なんかは、馬に草でも喰はす原っぱにしてゝと、暴徒の首領 Cade が喉叩を切つた位、こゝは富の象徴で、或る意味から言へば庶民には縁遠い存在でもあつたのである。次も同様である Dick. My lord, when shall we go to Cheapside and take up commodities upon our bill ? — *Shakespeare, Henry VI, IV. 7. 134.*

殿、何時チープサイドへ行つて、証券(ほこ)を代に商品を取立てましようか。

bill は長柄のはこ、槍または証券の意味であるから、武力で商品を徴発するのを証券担保で品物を徴収するのにかけたものであり、以上の二節はいづれも Cheapside の財力が支配的だつたことを暗示している。

Cheapside は一〇六七年には West Campe、一二二四年には West Chop、一五一〇年に始まる Cheapside と改めた。West Chop

は旧市 *Fischep* (*East Cheap*) と区別するための名称であつた。*Cheapside* が大昔の *Walling St.* 街道筋に当り、各種商品の売買市場だつたことは *Cheep* が古代英語の *Cup* (= *bargain, barter*) に該当することから。また *Cheapside* を中心としてその延長である *the Poultry* を始め、左右に分岐する *Wood St.*, *Milk St.*, *Honey St.*, *Ironmonger Lane*, *Friday St.*, *Bread St.* 等はすべて文字の示す通り当該商品取引の中心だつたことを示している。*Friday St.* はカトリックの肉類断食日である金曜日に、こゝで魚類が販売された事実によつて命名された。

中世紀の *Cheapside* は始め北側は空地で、現在よりもつと広くかつ *St. Paul's* より二十八呎も高台であつた。当初主として一階建の *sed* (= *warehouse*) が並んでいたが、両側に家が出来てから *Elizabeth I* 時代には四、五階建の家屋となつた。商店の庇からは斜めに *penthouse* (差掛屋根) が出ており、夜分はこれを下ろして店を閉じた。*penthouse* が縁の意味に用ひられるのはこの差掛屋根の構造から出たのである (*Shakespeare, Macbeth, I. 3. 20; Dickens, Christmas Carol*)。

この道路で最も異彩を放つていたのは *Goldsmith Row* で、一棟の建物の中に同じ四階建の立派な十軒の住宅と十四軒の貴金屬商が櫛比してその豪華を競うていた。

*Cheapside* には数ヶ所に十字架、噴水像(塔)、水道等の施設があつた。一二九一年 *Edward I* は *Queen Eleanor* 追福のため聖母、キリスト、殉教者達の像を配した皇后の十字架を建てたが、遙か後代、清教徒はこれをカトリックの象徴として破壊したので、一

五九六年テムズ河の水を引いて *Ephesus* やローマ人の信仰厚い月の女神 *Diana* の噴水像を建てこれが名物となつた。*Shakespeare* の *As You Like It* に於ける *Diana* はこれを指すものであらう。

*Rosalind. I will weep for nothing, like Diana in the fountain.*

—— *Shakespeare, As You Like It, IV. 1. 155.*

噴水像のマイヤナのようにむやみに涙を流すでしよう。

*Cheapside* には *Conduit* または *Standard* と称し、人間の像に象つた水道口が数箇所あつた。東端には *Paddington* から鉛管で水を引いた *the Great Conduit*. 中央には *the Standard*, 西端には *the Pissing* (又は *Little*) *Conduit* があつて、噴水像(塔)や水道周辺の広場はページェントや集会場、散策地、緑日、市場に利用された。他方こゝに量目不足のパンや腐肉を売つた商人、市の高級役人を侮辱した犯人の苔刑台や曝し台 (*pillory, stocks*)、曝し首台及び仕置場があつたことは他の盛り場同様であつた。暴徒の首領 *Wat Tyler* は一三八一年に、また *Jack Cade* は一四五〇年にこゝで多数の人を死刑に処しており、更に *DeFoe* は *The Shortest Way with the Dissenters* を發表して当局の忌避に触れ、こゝに *pillory* (曝台) にかけられてゐる。しかし *Cheapside* に市の拘留所 (*the City Counter*) が数箇所あつたことは、こゝが常時犯罪の発生地だつた一つの証拠である。馬上試合 (*tournament*) には宮廷用の観覧席として往来にアーチが掛け渡されたが、一三二九年 *Edward III* の時に崩壊して椿事を惹起して以来 *Bow Church* の前 *Crownside* (*the Royal House*) または *Sidam, Tamarside* と称する石のスタンドを設け *Henry VIII* の時まで用ひた。

市当局は物日には水道または噴水像 (塔) に祝酒として claret を噴出させ大盤振舞をした。有名なのは一二七四年及び一二九九年に Edward I が皇后を陪同して旧市を訪問したとき、また一六四一年 Charles I が来たときのものである。Shakespeare に次の一節がある。

Cade. Now is Mortimer lord of this city. And here siting upon London stone, I charge and command that, of the city's cost, the pissing-conduit run nothing but claret wine this first year of our reign. — Shakespeare, *Henry VI B*, IV. 6. 2.

ケード さあ、モーチマーがこの市長になつたんだ。このロンドン石 (註) に坐つて命令してやる。この噴水像から俺の治世の第一年はクラレット酒ばかりを噴き出せよう。

(註) London stone は現在 Cannon St. の St. Swithins の壁内にある。Caunden の説によらば、これはローマ人の lapidarii (道線標石) であつて、北方の Walling St. 東北方の Ermine St. 東方の Vicinal Way 等すべて彼れらによつて中心としてその距離を計つた。

James Frazer は、昔王位就任の際、石の上に立つたり、これを叩いたりしたのは、王位が石の如く強固ならんことを祈つた当時の風習だつたとしている。ロンドン郊外の Kingston は九〇一年乃至九七八年に、王が立つて王位を宣言した石が今も残つており、Devonshire の Bovey Tracey でも、昔市長就任の際石を叩く習慣があつた。

### 三、Bow Church の庶民性や cockneyism

Cheapside は奢侈富貴と同意語だつた反面、こゝにある Bow Church と商家の年期小僧連によつて庶民的性格もまた顕著であつた。Bow Church の鐘の音が聞える所で生まれた者を Cockney (生粋のロンドン児) と言ふのも、多分にその原因をこの小僧連に發している。彼れらは陽気で團結心が強く、仲間が市民と喧嘩した場合、club (棍棒) と叫ぶと彼れらは一斉に戸外へ飛出してこれに加勢し、入牢など平氣であつた。英国近代に於ける社会主義運動の一端は彼れらの團結心に發しているのである。Chaucer の *Canterbury Tales* の *Cook's Tale* に於て、Edward III 時代に於ける愉快な小僧 Parkyn Revelour の生活を次の如く描いてゐる。

At every brideale would he sing and hope ;

He loved bet the tavernne than the shope —

For when ther any riding was in Chepe

Out of the shope thider wold he lepe,

And til that he had all the sight yseen,

And danced wel, he wold not come agen. — Chaucer,

*Canterbury Tales*.

どの婚礼でも、彼れは歌ひ踊り、

店より賭や酒場が好きだつた。

と言うのは、チープに何か行列の催しがあると、

店からそこへ飛んで行き、

終はりまで見物して踊り抜くまで、

帰へろうとはしなかつたから。

Bow Church の鐘はもと六箇、一六八〇年には八箇、一八八一年には十二箇から成立していた。これらの鐘が鳴らす有名な Whittington Chime は市民の生活を規律する親しみ深いものであった。

前述したように、Bow Church の鐘は城門閉鎖や消燈合図の晩鐘 (curfew) であったのみならず、一四六九年には市の命令により、九時の晩鐘は小僧連の夜業手仕舞ひ、帰宅命令の合図となった。鐘撞きが往々時間を忘れて小僧連と喧嘩したことは有名な話である。庶民生活の中に明け暮れるこの寺院には色々の伝説がまづはつてゐる。Cheapside の主家を逃げ出した小僧 Richard Whittington が旧市の北方五哩の高台 Highgate まで来ると、と聞える Bow Church の鐘が次の如く聞えた。

Turn again

Thrice Lord Mayor of London.

そこでまた主家へ戻つたところ、予て主人の船に托して売物に出した愛猫は兎害に悩む Barbary の王に高く売れ、これを資本として始めた絹織物業は繁昌するし、主人の娘 Alice とは結婚するし、万事とんとん拍子に行つて、遂に市長に三選(通説は一三九七年、一四〇六年、一四一九年の三選、但し Whitaker's Almanack 一九二六年版は一三九八年を加へ四選としている。)されたと云う伽蹉めいた伝説が残つてゐる。しかし Whittington は実在の人物で、代々の国王に多額の金を用立て、その後証文を焼払つて太つ腹なところを見せた人物である。もう一つは旧市の紋章に象つた Bow

Church の風見 dragon が the Royal Exchange の風見 grasshopper (バッタ、建設者 Sir F. (Fresham) の紋章)と一緒にすると変事が起ると伝へられる。しかしである時、双方が同一修繕工の手で下ろされ、同じ仕事場に置かれたところ、その年に一八三二年の選挙法改正案が大波瀾裡に成立した (Haydon, *Correspondence and Table Talk*)。

Bow Church の寺格は決して高いものでなく、有名になつたのは全く庶民との縁りによるもので、昔から信徒に名士がいはいの不思議な位である。同寺にある Milion の洗礼記念牌も隣接の教区が一八七八年に Bow Church の教区と合併した際 All Hallows, Bread St. からここへ移管されたものにすぎない。現在の寺院は一六六五年の大火後 Sir C. Wren が再建したもので、もつ William I 時代の建立にかゝり、Norman 式建築であつた。当時の寺名は Ecclesiae Sanctae Mariae quae dicitur ad Arcus (the Church of St. Mary which is called 'at the Arch' or Bow. アーチの所で呼ばれる聖マリアの教会)と称し、一八九三年には St. Mary de Archibis (Seyn Marie Chyche of the Arches) または St. Mary de Arcubus と言ひ、更に降ひつて St. Mary-le-Bow または単に Bow church と言つた (de Archibis=de Arcubus=le Bow=of the Arches)。Bow なる名称の起源に就て Slow その他の研究によると、crypt (地下納骨礼拝堂) が円天井造りの石柱から出来ており、本堂がその上に建てられていること、また lantern (頂塔) が石のアーチで支へられていることから來たものとしてゐる。

cockney なる語は周知の如く、今日では言葉に特有の訛をもつ無

教育な生粋のロンドン児（主として East End の住民）を言うが、次に示す N. E. D. の引例によると、かゝる意味に使用されたのは一六〇〇年以降のことである。

I scorn to let a Bow-Bell cockney to put me downe. —

Samuel Rowlands, *Letting of Humours Blood in the Head-Vaine*

(1600).

無学な下町の奴にやりこめられたりなんかしてたまるもんか。

元義は cocken-ey = cock's egg で鶏が時々生む卵黄のない小やな畸形の卵を意味した。これから転じて(1)腰抜け、(2)氣取り屋(殊に女)、(3)甘やかし子等の意味に用ひられたが、Shakespeare は専ら(1)(2)の意味に使つた。(Shakespeare, *Twelfth Night*, IV. 1. 15. ; *King Lear*, II. 4. 123.)

なまこ cockney の出所に就く John Minshew は *Ductor in Linguae* (1617) の中で次の如く説明してゐる。

A cockney or cockny — applied only to one born within the sound of Bow Bell, that is within the City of London, which tearne coming first out of this tale : That a Citizen's some riding with his father in the country, asked when he heard a horse neigh what the horse did ; his father answered "neigh". Riding further he heard a cock crow, and said : "Does the cock neigh too ?"

これによると、cockney なる語は父親と田舎へ行つた少年が馬の嘶くのを聞いて「あれは何だと聞いたのに対し、父親があれば馬が嘶くのだと答へたところ、更に鶏が啼くのを聞いてその子供が、あれ

も嘶くのかと聞いたとの話から出たと言うのであるが、この説は一般に荒唐無稽とされている (E. H. Sugden : 英語青年一九四九年一月月号市河博士「縁語率引」)。cockneyism に就ては市河博士の「英文法研究」に於ける「Dickens と俗語の研究」参照。また現代文の実態に就ては East End に取材した Arthur Morrison の *Tales of Mean Streets* 及び河南 Lambeth を対照とした Maugham の *Liza of Lambeth*, Chapter V. を参照せられたる。

Bow Church も第二次世界大戦に於て一九四〇年八月二十四日、一九四一年一月十日及び同年五月十日の空襲で大損害を受けたが、Charles II と Queen Catherine の頭文字 C 二個を組合せ文字 (monogram) による祭壇や Milton の洗礼記念牌は難を免れた。

#### 四、旧市の現代化と Wordsworth

時は流れて十八世紀となり、旧市にも第一、第二産業革命の愛音が高まつて、Lombard St. の金融的勢力が支配的となり、寺院の尖塔は目立つてすくなくなつた。しかし詩人はこの市の浄化を忘れなかつた。哀れな田舎娘 Susan は鷓鴣 (mis) のたつ四月の朝——朝霧は晴天の微とロンドン人は言う——Wood St. が Cheapside に合するその一角に茂るスズカケの木 (plane tree, platanus) (註二) の鳥籠に鳴く thrush (歌々々) thrush, navis, song-thrush と云ひ、学名は Turdus musicus。市内到る所で聞かれ、澄んだ円みのある含み声をもつているの声を聞いて思ひを故郷の山河に馳せた。やがて彼女が現に見る Cheapside は何時しか谷間の一条の流れと化し、そこに展げるものは唯緑の牧場、彼女の

賤が伏屋であつた。詩人は万物を詩化するが、Wordsworth の自然観は Susan の幻想を通じて、大都會の中にも大自然の佇むを發見したのである。

At the Corner of Wood Street, when daylight appears,

Hangs a Thrush that sings loud, it has sung for three years :

Poor Susan has pass'd by the spot, and has heard

In the silence of morning the song of the bird.

'Tis a note of enchantment ; what ails her ? She sees

A mountain ascending, a vision of trees ;

Bright volumes of vapour through Lodbury glide,

And a river flows on through the vale of Cheapside.

Green pastures she views in the midst of the dale,

Down which she so often has tripp'd with her pale ;

And a single small cottage, a nest like a dove's,

The one only dwelling on earth that she loves.

She looks, and her heart is in heaven : but they fade,

The mist and the river, the hill and the shade ;

The stream will not flow, and the hill will not rise,

And the colours have all pass'd away from her eyes !

—Wordsworth, *The Reverie of Poor Susan*.

(註) Lodbury は Cheapside 東方の町名。

空爆じやう Cheapside 周辺の一時は廢墟となり、徒に黒いモヤムヤキ (black redstart) (註1) の鶉となつてゐたが、何時しか昔日の平和は還り、スズカケの木 (註2) は今なお同じ所に法の保護を受

けつゝ樹齡を重ねてゐる。(trays Inn に Lord Bacon 手植えのキサザ (catapa) (註3) があり、スズカケがこゝかしこに亭々として聳えてゐる——Staple Inn ; trays Inn ; St. Giles, Cripple-gate。旧市街の自然が憩ひ限り、更に第二の Wordsworth が現はれ、世代の斷層 (fault) を超越して、自然主義を基調とした都會文學の發足を促すであらう。

(註1) black redstart の学名は *Phoenicurus phoenicurus*。

南方から渡來したこの鳥は毎年増加してゐて、一九四〇年以來ロンドンの都心にも住んでおり、北は Lancashire 及び Yorkshire にまで達してゐる。戦時中よくロンドン市内爆撃跡の廢墟に住んでゐた。

(註2) plane tree の学名は *acerifolia*。楓狀の葉をぐけ、ロンドンによく見受ける。高九十呎乃至百呎、枝は横へ八十呎以上に拡がるものがあふ。shade-tree (日除けの木) に好適。

(註3) catapa の学名は *bignonioides*。大ぎんべん形形の葉をぐけ、七月白い花を開く。硬い樹木で高五十呎、枝は六十呎に拡がるものがあふ。shade-tree に好適。

### 〈参考文献〉

- E. Montizambert, *Unnoticed London*.  
 James D. Hart, *The Oxford Companion to English Literature*.  
 J. D. Wilson, *Life in Shakespeare's England*.  
 A. C. Baugh, *A Literary History of England*.  
 W. Holznecht and Ross, *Outlines of Shakespeare's Plays*.

- J. J. Mallon, *Social Progress in East London* (Aug., 1949.).
- T. Burke, *Line House Nights*.
- E. H. Sugden, *A Topographical Dictionary to the Works of Shakespeare and His Fellow Dramatists*.
- W. Kent, *An Encyclopaedia of London*.
- W. Kent, *London for Everyman*.
- D. Ogrizek, *Great Britain. The Trolley Society, Lands and Peoples*.
- F. Muirhead, *London and Its Environs*.
- Ward, *Lock and Co, Ltd., London*.
- L. Golding, *The Jewish Problem*.
- J. Fisher, *Watching Bird*.
- W. H. Rowe, *Trees and Shrubs. The Albion*, No. 26.

(金沢大学法文学部講師)